

石川 康明著

『日蓮と近代文学者たち』

△近代文学者の日蓮聖人像(観)△を知ることは非常に大切なことである。文学という大衆性——その影響力の強さはいまさら述べるまでもない。

時代とともに生き続けてきた日蓮聖人の映像は、多種多様である。闘争的で排他的な宗教活動。奇跡伝に充ちあふれる生涯は、現世利益の象徴として「祖師信仰」へとあおがれていった。一方、明治という歴史変革のなかで、連続・不連続ともいふべき思想は、新たな方向へと歩みはじめた。同時に、聖人像も、熱血漢・信念の人・預言者・国家主義者に代弁される、強さの聖人像がうちだされてきたのである。こうしたなかで、近代文学者がさまざまな角度から照射した日蓮聖人像(観)とは、一体どのような姿であったのであろうか、という問題を解明したのが本書である。

著者の石川康明師は、現在、日蓮宗現代宗教研究所主任として、はばひろい活動を展開している。文筆活動では、『日蓮聖人の手紙』一・二(※現代訳。昭和五十一年・国書

刊行会)。「近代文学者の日蓮聖人像」(『現代に生きる日蓮聖人』所収・昭和四七年・隆文館)。「青春の日蓮」(『日蓮の伝記と思想』所収・昭和五〇年・隆文館)。「日蓮遺文削除と国神勸請問題」(『戦時下の仏教』所収・昭和五二年・国書刊行会)。「小川泰堂——日蓮大士像の唱導者」(『近代日蓮教団の思想家』所収・昭和五二年・国書刊行会)。「白亀の報恩」(昭和五三年・ピタカ)等を代表に、教十篇の論文を挙げることができる。したがって、その活動は宗内・外に知られている。石川師が本書を著すには、長い蓄積した研究活動があった。『日蓮宗新聞』に昭和四七年に寄稿して以来、八年間にわたり、しかも毎回「近代文学者の日蓮聖人像」を連載した苦労が実った、といえよう。

さて、本書の特色は、「日蓮の信仰・教説・人格および一代の事跡は、文学者の書いた作品のなかでどのように描写されているのか、日蓮にふれあった文学者たちは自らの人生と文学的精神をいかに作品のうちに投影させ、また精神の内奥に日蓮を焼きつけようとしたのか」と著者がのべ、考究している点にある。この著者の考究方法は、また一方において、日蓮聖人の実像と虚像を明確なものにしており、著者の卓説といえよう。

もとより、聖人の実像は次の言葉のごとくであろう。「日蓮認識の根本は△日蓮に聞く△にしかはない。日蓮の書きしるした遺文は、日蓮その人を知るための明鏡であ・

る」。同時に、遺文こそが日蓮聖人の永遠の生命であり、実存なのである。この日蓮聖人御遺文は、江戸期に入るや在家居士の手によって、幾多も出版された。しかし、平仮名が片仮名に改められていたり、誤字・脱字が多かった。この事実を直視し、遺文校訂という一大事業を成したのが小川泰堂である。泰堂は、幕末の激動した上下混乱の時代から、明治の廃仏毀釈の嵐のなかで、『高祖遺文録』三十卷、『日蓮大士真実伝』五巻を著述した。特に、『真実伝』は明治期だけでも十七版をかぞえる。この重版数をみただけでも、泰堂がいかに大衆的普及に貢献したかがわかるであろう。また『遺文録』に注いだ泰堂の姿勢こそ、聖人に対する直参信仰であり、大衆に聖人の実像を宣布する意図があった。

著者が、「小川泰堂を文学者の一人にあげることには、必ずしも適當ではなく異論があるかもしれない。しかし（中略）その著作は深い文学性を有していること、近代文学者による日蓮像形成の原点となり、しかも大きな影響を与えたこと、などの点を考慮して本書のなかに収録した。」と述べているのは、当然の起結であったであろう。すなわち、在家仏教に転じ、日蓮主義を唱導した田中智学は、泰堂の足跡を發展させた第一人者である。また、この智学に助言され、親交を深めた高山樗牛・姉崎嘲風・笹川臨風・坪内逍遙・中里介山・宮沢賢治などは、智学の膨大な著作の刊

行や文書布教および国性文芸運動の展開の過程で、親密度の濃淡はあるが、いずれも智学と結ばれていた文学者達である。したがって、近代文学者と日蓮聖人の一遇こそ、泰堂に起点を求めてなんらの不思議はあるまい。本書は、この泰堂と智学の二人が、近代文学者達に、「おりなす糸」のように結ばれている点を、明確にしてくれている。

ところで、この泰堂も昨年（昭和五三年）百回忌を迎えた。著者がこの記念の忌日に泰堂を著わした事の意義は大きく、今後、泰堂研究に本書をぬきにしては語れまい。

最後に本書の目次を紹介すると、小川泰堂——日蓮大士像の唱導者——・高山樗牛——預言を証明した崇拜的英雄——・森鷗外——辻説法と従軍——・坪内逍遙——野に叫ぶ聖者——・村上浪六——熱涙熱血の多情漢——・中里介山——怒濤のような巨人——・武者小路実篤——ひたむきな真理と実践者——・宮沢賢治——末法唯一の大導師——である。サブタイトルは、著者がいずれも作品を中心につけたものであるが、その内容とあいまって八日蓮聖人文学√という、新しい分野を開拓した視点をよく表現している。それぞれ従来の方芸評論の枠組をこえ、また日蓮聖人研究でこれまで充分ふれられてこなかった日蓮聖人と近代文学者とのかわりを分析論及しており文学者達が照射し抱懐した日蓮聖人像の特色を明らかにした学術書といえよう。

多くの方々に一読することをすすめるとともに、ひろく活用されることを祈ってやまない。

A5判・二六五頁・発行所、東京都千代田区神保町二
の二、株式会社ピタカ・二二〇〇円。

△宮川 了篤▽

編集後記

▽「現代宗教研究」は、「所報」として創刊されて以来、早くも第十三号を数えるに至りました。通常、一年に一冊の発行ですから、十三年間に及ぶ研究内容が本誌には集録されていることとなります。最近、日蓮聖人第七百遠忌を当面の目標に、目下△日蓮聖人の報恩観▽を研究テーマの中心にすえ「恩の構造」を特集してきました。▽今号においても、報恩の教化活動の具体化を通して提示された内容を掲載しました。同時に、日蓮聖人が身をささげて願業として刻印された諫暁・誓願・立正安国の教えなどとの関連の中で、この報恩精神をとらえることが必要であり、真の報恩は諫暁・誓願・立正安国の信仰実践にむかうものでなければならぬとの観点から、その第一歩として△諫暁と報恩▽を特集しました。▽また、近年「教化研究会議」などにおいて宗教法人法と寺檀関係のあり方について討議されることが多くなりましたので、今回宗教法に関する論文を掲載しました。今後、この問題はきわめて重大な事柄としてクローズアップされる可能性が強いと思われまますので、大方の一読をお願いいたします。▽教研会議、研究ノートは、今年度の研究活動の一端を示すものです。現在、研究員による統一した共同研究として△教団論―その歴史と展望▽に取組んでいますので、次号以降にはその集約された研究成果を発表したいと念願しています。▽今号では、研究書の紹介にいく分ページ数をさいて掲載しました。たんなる図書紹介ではなく、研究書を読んだ内容理解をふくめてまとめてみました▽「現代宗教研究」について、ひき続きご叱正、ご教示のほどお願いします。△石▽